

耐震問題で揺れる
UR(旧住宅公団)の団地
生活基盤の住居が足元から揺らぐ…

足元から揺れる

11/15(土)

映画と話
@TAMA ほう

①16:00 ②18:00

上映終了後トークなしで入れ替え

懇親会19:25 2時間

ゲスト:早川由美子監督

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2011 スーパー! IDEHA 賞受賞作品

監督・撮影・編集:早川由美子 音楽:Sage、岡ゆう子、hou 事業仕分け映像提供:株式会社ドワンゴ
チラシ画:井上ヤスミチ チラシレイアウト:富田吉樹 2011年/日本/HDビデオ/カラー/73分

住民の安全のためにはあるはずの「耐震診断」を
住民の追い出しのために使う。
このURの姿勢こそ、「耐震」「偽装」ではないのか。
怒りで耐えがたい震えが来る。
ジャーナリスト 大谷昭宏

映画のあらすじ

耐震性不足を理由に取り壊しが決まった、UR(旧住宅公団)管理の高幡台団地73号棟(東京・日野市)。これまで、URから耐震改修を行うと知らされていた住民たちは、突然の方針転換に驚く。

本当にこの建物は危ないの？ 直すことは出来ないの？ と疑問を持った住民たちが、情報公開請求で資料を請求するも、構造設計図はすべて黒塗り、決定の過程も不透明なまま。UR 団地の削減方針が決まったのと、時を同じくして発表された73号棟の取り壊し。背景にあるのは団地の削減、民営化なのか？

居候生活をしながら映画を作る監督は、偶然この問題を知った。不安定な住環境に身を置く彼女は、73号棟の住民に親近感を持ち取材を始める。夢を抱いて40年前に越してきた時の様子を語る女性、「この団地がふるさと」と話す青年、追い出しのストレスに悩まされる男性、退去をめぐる家庭内での意見の相違…。UR の不誠実な対応に納得できず、退去期限を過ぎた今も73号棟で暮らし続ける人々の生活と想いを、「家ナシ」監督のカメラが捉える。

映画は、団地に住む人々の暮らしに密着し、住宅問題に取り組む専門家、UR、国交省…と取材する中で、公共住宅問題に潜む、日本の組織体制の問題点をも浮き彫りにする。「安心して住み続けたい」…、そう願う人必見の“住宅”ドキュメンタリー映画！

市場原理の嵐の中で吹き飛ばされる記憶と暮らし。
私たちはもはや根づくことすら許されないのだろうか。
73号棟で起きていることは私たち自身の未来である。

住まいの貧困に取り組む
ネットワーク世話人 **稲葉剛**

入場料： ¥1,500 (各回入替15名)

懇親会： 予約制 (10名)

場所： **ダイニングバー・モンキーランド**

多摩市豊ヶ丘1-11-1(小田急・京王多摩センター駅徒歩15分)

お申し込みは、予約フォーム www.taenoha.com

または 050-5891-1977 主催：たえのは



(多摩センター駅東口から信号渡って線路下を直進、ラーメン店「麺でる」さんを左折、乞田川沿いを右折、2つの橋を過ぎてまっすぐ、白い階段が**モンキーランド**の入口です)

たえのは

検索



/taenoha



@taenoha